

南川高志編著

『知と学びのヨーロッパ史』

——人文学・人文主義の歴史的展開——

伊藤 順 二

本書は、京都大学大学院文学研究科の二一世紀COEプログラムに関連する研究活動の最終報告書として出された。時代も研究領域も異なる一二本の論文を収めたこの書物は、散漫な論文集に留まることなく、一冊の書物として読みうるまとまりを保っている。編者の南川氏が漏らしている、同時代的状況に対する大学人としての危機意識が、執筆者全体に共有されているためだろうか。まずは、補助線を引きつつ内容を要約したい。

序（南川高志）においては、人文学的学知が差異化のための文化資本であったこと、同時に「ヨーロッパ文明の最高の産物」となっていることが確認される。

第一部「人文学と人文主義のダイナミズム」担い手と力を考える」は三章からなる。

第一章「大帝國統治と教養：一官僚のみたローマ帝國」（井上文則）は、『皇帝史』（三六一年）の著者アウレリウス・ウィクト

ルを扱う。彼の帝國治世の評価基準は皇帝個人の「学問、品の良さ、愛想の良さ」だった。言いかえれば皇帝の教養が帝國の繁栄に直結するはずだった。学問熱心ではあったが雄弁の才なく愚鈍と評されることもあるコンスタンティウスⅡ世の姿がウィクトルにおいては肯定的に描写されるのは、「教養ある皇帝Ⅱ善政」という規範図式を優先したためである。その背後には「無教養」な軍人と蛮族が悪政を行っている、という現状認識があった。ウィクトルの「教養史観」は、彼個人が「皇帝史」という業績を足掛かりに首都長官にまで出世したという事実から導出されたとも考えうる、という。

井上論文からは、ローマ的あるいは西欧的教養のひとつの中心に歴史学があり、その（統制／征服されるべき）外部に軍人と蛮族があったことが浮かび上がる。これは本書全体の主調低音の一つと読解しうるテーマであり、井上論文は巻頭論文にふさわしい、といえよう。加えて、コンスタンティウスへの同時代人の評価においては、「学問」と「品の良さ」が必ずしも同一のものとして捉えられていないこと、換言すれば学識と人徳、知育と徳育との間にズレがあることを読みとりうる。ただしこの件（知と教養なるものの内実）に関しては、井上は後続の論文と比較して踏み込んだ考察をおこなってはいない。例えばギンズブルグが考察しているような歴史学的学知と修辞学／雄弁術との関係について、何らかの示唆が欲しかった。

第二章・第三章はそれぞれ教育の受け手側と与え手側から、教養なるものの多様性を瞥見するものとなっている。だが、共に論文としての完成度は高いが、本書全体の論調からは多少浮いた観

も覚えた。評者の勝手な印象に引きつけて言えば、宗派的あるいは宗派横断的教育実践という（君塚論文に少し言及のある）問題を発展させれば、五章や八章とリンクする論文となりえただけに惜しいところである。

第二章「実業家と教養・近世フランス商人の世界」（君塚弘恭）は一八世紀ポルドーに開花していた独自の商人文化に眼を向けている。ポルドーの海港商人は、例えばイェズス会コレージュ最終学年の修辭学クラスに至る生徒は稀だったにせよ、単なる職業訓練や社会的上昇の手段としての知識獲得に留まらない教養空間を形成していた。一七八三年に創設されたミュゼ・ド・ポルドーは、貴族・官僚層中心の閉鎖的アカデミーとは対照的な開放性を持つ組織だった。蔵書等から垣間見える商人の教養は、ラテン語と英語、自然科学と神秘主義、実学と余暇活動を並立させていた。所有文学作品に同時代のもが多く古典文学が少ないなど、貴族層との差異も窺える。この独自の教養空間は、一九世紀には公教育化と専門化、そして宗派間係争によって消滅したという。君塚論文からは、古典的な秩序に背反する学知が一八世紀に肥大化しつつあったことが窺える。

第三章「学びを支える社会と力・近代イギリスの教育とチャリティ」（金澤周作）は教育の資金源に着目する。そもそも高等教育機関のほぼ全ては貴族や王のチャリティによって維持されていた（基金立）といえるが、英国では中流向けグラマー・スクールから下層向け日曜学校に至るまで、チャリティ運営の教育施設が大多数を占めていた。一九世紀にチャリティ全般について悪用と不適切な運用を批判する声が強まるが、その発端となったのは一

八一六年におけるロンドンの教育チャリティに対する調査である。教育チャリティの合理化は一八六〇年代に一応の完成をみる。募金立チャリティの給付が同一人物に重複しないよう法整備が進み、チャリティ組織化協会が設けられている。しかし故人の遺志によって運用を拘束されている基金立チャリティの統制は難しく、個別の理念の総計としての多様性がイギリスでは維持されたという。この多様な理念の内実について、宗派上あるいは教育方針上の見取図があればよかつたかもしれない。

第II部「人文学と人文主義のリアリテイ…受容と変容を考える」は五論文を収める。

第四章「古典の復興と人文主義のリアリテイ…ヘレニズムの歴史家ポリュビオスの近世西ヨーロッパにおける受容」（藤井崇）は、循環政体論・混合政体論・市民軍制論で有名な前二世紀末のポリュビオス「歴史」の（再）受容史をたどる。一五世紀初めのフイレンツェでブルニが初めて、「歴史」のギリシャ語からラテン語への註解付き抄訳書を出版した。翻訳はミラノ攻略で終わっており、ミラノと敵対していたフイレンツェの政治的状况への迎合が透けて見える。その後、一六世紀には「歴史」第六巻のローマ軍制論が注目的となる。マキャヴェッリ「デイスコルシ」のヴェネツィア市民軍制論は、直接ポリュビオスに言及しないものの、第六巻を初めて高評価したルチェッライの影響下に書かれている。オスマン帝国を巡る言説上でもローマ軍制論はオスマン理解のための参照枠を提供し、オランダではリブシウス経由でマウ

藤井論文は、近世の教養が現代的教養とは「まったく次元の違うリアリティと緊張感を持った」ものである、と結論している。

しかしむしろ、七章の議論に従えば、歴史学あるいは古典学が近代に至るまで国家にとって「有用」な学知であり続けたこと、国家学・政治学の補助学的側面を持ち続けた（持ち続けている）ことにこそ注目すべきではないだろうか。また、一章においては蛮族と並置されている、軍人に対する学知のスタンスの変化も興味深い。近世においては、古典学的学知が軍事的な知を取り込んでいると同時に、軍事的な知が古典学的学知を取り込んで、とでも表現できるだろうか。

第五章「人文主義と宗教改革・チエコにおける人文主義の展開とフス派運動の影響」（藤井真生）では、人文主義のモラヴィアと宗教改革のボヘミアが対比的に論じられる。急進フス派の本拠地だったボヘミアでは宗派対立が先鋭化し、ドイツ人教員・学生の大量脱退という民族的対立もあってボヘミアのプラハ大学は衰退への途をたどった。一方、モラヴィアには一四世紀以来、ペトルカとのコンタクトに象徴されるように、イタリア人文主義との交流を培っていた王国尚書局の人脉があった。モラヴィアではフス戦争を終結させた一四三六年のパーゼル協約後、穏健フス派（聖杯派、チエコ兄弟団）とカトリックの共存社会が形成される。ラテン語とチエコ語（クラリツェ聖書等）の出版事業が並立し、越境的な人的交流が維持されたという。

藤井論文においては、プラハ大学の衰退がむしろ印象に残った。ボヘミアを人文主義の外部、あるいは失敗例と見なすべきかどうかは評者には分からないが、ボヘミアの状況についても（チエコ

史としては概説的なものになるのだろうか）対比的に論じられる必要があると思われる。

第六章「歴史叙述とアイデンティティ・中世後期・人文主義時代のドイツにおけるその展開」（服部良久）では、都市史・ラント史の社会的意義が論じられる。一五世紀に都市貴族は血縁的・制度的閉鎖性を強め、歴史学は支配エリートの正統性の担保に資することとなった。富裕市民の保守的心性、ラントが共同体としての自己表象を求めたこともこの傾向に付随する。一方で愛郷的叙述に部族バトリオティズムは、人文主義的テクストの批判的受容を開始していく。例えば、第一章のウィクトルスの「ゲルマニア人」蛮族」観を共有していたタキトウスへの異議が現れてくるのである。

服部論文は二・三章と共に知の再生産システムに関する詳細な実証的研究であるが、やはり本書全体のまとまりからは少々ズレている印象をも受ける。だが古典学的学知の外部から教養が叢生している面を指摘していることは重要である。

第七章「啓蒙主義と人文学・近代ドイツにおける歴史の科学化、科学の歴史化」（佐々木博光）も第四章・第六章に続いて歴史学を関心の焦点としている。すでに一八世紀に歴史学的手法の科学化（彼岸的要因の放逐）という形で知の歴史化は進んでいた。シユレーツァーが因果法則の解明には未来学的効用があると声明し、アプットが歴史学を「隠れた要因」の究明と捉えるなど、歴史学への科学的／実利的価値付けも同世紀末にはなされていた。しかし実はこれだけでは歴史学は神学や法学という上級学部の補助学以上のものにはなりえない。学としての歴史学が成立するには、

「歴史は宗教である」との言も残しているランケによる歴史学の講座化を待たなければならない。史実を積上げる作業が人格陶冶に資すると信じるランケは、歴史学の教養的価値を生成した。著者はトレルチユの語法を借りて、ランケの有機体論的視点とその前世紀の機械論的視点の併存があつてこそ歴史学は成立しえた、と結論している。佐々木論文は、徳育と知育、実学と教養という対立図式を鮮明に示している点で、本書の一つの理論的参照点となりうるものである。

第八章「人文学の受容とその葛藤・東スラヴの正教世界と「ラテン文化」受容の問題」(橋本伸也)では、ウクライナにおいてカトリックを模倣しつつ対抗する形で人文学Ⅱ「ラテン文化」が正教世界に導入された経緯をたどる。すでに一六世紀のキエフ知事オストロークの正教学校や兄弟団校・印刷所においてスラヴ・ギリシア・ラテンの知は併存状態にあつた。一六三一年にキエフ府主教モヒラが設立したコレギウムは、哲学の一部と神学の講義が表向き禁止されていた等の制限はあつたが、新スコラ主義の拠点としての名声を誇つた。これらの教育経験はウクライナのロシア編入後モスクワに逆流し、限界はあつたにせよ正教神学校Ⅱ聖職者養成機関を林立させていく契機となつた。

第Ⅱ部末尾を飾る橋本論文は、少々強引に解釈すれば、「軍人」を扱つた第Ⅱ部冒頭の藤井論文とは対照的に「蛮族」すなわちラテン文化の地政学的外部を扱つている。正教世界はラテン文化なるものを総体として受容あるいは反発したのか、あるいはラテン文化内部の多層性を意識しつつ和魂洋才的発想をもつて選択的に横領しえたのか、逆にいえば人文学的学知の翻訳可能性・可

搬性はどの程度のものであつたのか、についての展望を拓く論文といえる。

第Ⅲ部「教育の発展と人文学の行方Ⅱ:『学び』の場の意義と本質を考える」は四論文からなる。

第九章「専門と教養Ⅱ:中世パリ大学の理念から」(川添信介)は一三世紀を二つのルネサンスの狭間と捉え、この時期に整備された大学の学部構成に眼を向ける。大学は入れ子状の二項対立構造として図式化されている。すなわち、大学の学部は上級学部(神・法・医学部)と、下級学部としての学芸学部(自由学芸 artes liberales)に二分される。各学部における授業は、規範テクストの解説と討論という二要素からなる。討論は、権威への依拠と合理性の追求という二規範に則つておこなわれる。学芸学部は哲学部とも呼ばれるが、アリストテレスというキリスト教にとつての異教的権威に寄り添う姿勢を見せ、一二七〇年代には異端的アヴェロエス主義として排斥も試みられている。しかし学芸学部は多元的世界像を保ちつつ、上級学部への準備作業として、また職業訓練としての有用性を身にまとうことができた。この学芸学は、分野的には現在の文理を包摂しているため人文学とは訳しにくい。しかし対立の構造はカント『諸学部の争い』の一八世紀、C・P・スノウの「二つの文化」(文系/理系)の二〇世紀と対比可能である、と示唆される。

川添論文も一章・七章と共に本書全体の俯瞰的構図を提供している。カトリック神学と異教哲学を競合させつつ包摂する学知として学芸学が記述されている点は、五章のボヘミア人文主義への

視線と重なり合う。この論文の主張するとおり、神学的学知が人文主義(的なるものである学芸学)の単なる対立項でないとするれば、教会における知育と徳育が人文主義とどのように相互作用したかについても興味が生ずる(修道院における教育/規律の問題を想起することは、今更あまりにフーコー的な視点だろうか?)。

第十章「宗派化と大学の変容…近世ポーランドにおけるイエズス会の学校教育とクラクフ大学」(小山哲)は八・九章で出された構図を更に肉付けするとともに、教育学が出現する十一章を準備しており、第三部の結節点となっている。コレギウムに代表されるイエズス会の教育活動は実学的なラテン語教育、いわば「役に立つ国際語」の教育によって人気を博しており、またイエズス会側にも改宗促進という実利的意図があった。一方で、ポーランド王国の威信を賭けたクラクフ大学は古典的教養を重視しつつ、多宗派併存を謳っていた。このため、五章に説明される十五世紀チエコの状況と一部重なりつつもねじれた対抗図式が成立することになる。クラクフ大学関係者から見れば、イエズス会は無料の/自由な教育を装いつつ、他宗派が共存する文芸共和国を宗派化する異国出自の異分子だった。しかし、イエズス会に対抗するために、大学はイエズス会的あるいは宗派的な教育(宣伝)技術(教授の列福運動など)を模倣することとなる。

小山論文はカトリック的学知と人文主義的学知が相互作用しつつ正教世界に流入していることを示している。同時に、イエズス会の中国布教における現地習俗への譲歩にも(狡猾な変節としてではあるが)ポーランド人が言及していることは興味深い。正教世界を超えた異文化へのヨーロッパ学知の移植の担い手として教

会組織の果たした重要性が垣間見えるからである。同時に、九章と併せて考えれば、異文化への教育/宣伝技術の淵源をカトリック的学知と異教的古典学知(あるいは、人文主義)との競合状態に見ることも可能だろう。ヨーロッパの内部に征服すべき植民地があった(どちらが植民地でどちらが本国だったのかはともかく)、と表現してしまうと言い過ぎだろうか。

第十一章「古典人文学の伝統と教育改革…フランス第三共和政初期の中等教育改革」(上垣豊)は続く十二章と並んで、人文「科」学対自然科学という現代の学的対抗図式に直結する状況を描き出している。

上垣論文では教育学が語られる。フランスの十九世紀は古典人文学の全盛期と形容しうる。フランス語教育も規範的文学作品の受容という意味で古典語的なものとなっていた。これはイエズス会の教育活動の盛行を受けた事態だった。修道会系学校は知育より訓育・徳育を重視するとして世紀末に至るまで人気が高かった。ここで教授される古典古代とは、非歴史的な理想化された言説上の存在である。これを批判したのが近代科学を標榜する二つの学問だった。教権派の伝統的教育の内容に対しては歴史学が、伝統的教育の形式に対しては教育学が、批判者として立ち上げられることとなる。

教育学者による改革運動の重要な焦点となったのが、エリート中等教員を養成する中等教育教授資格(アグレガシオン)である。一七六二年のイエズス会追放を機に作られたこの制度は修道会系の活動を圧倒するには至らず、教職の専門職化が叫ばれた。しかし一九〇二年のレイグ改革は不徹底なものに終わる。ドレフュス

事件に象徴されるような学知の布置が変化し、その過程で教育学という新興学問の有効性への疑念が、古典派だけではなく近代派の間からも上がったことが原因である。

第十二章「近代の大学改革と人文学の位置・オックスフォード大学優等学士学位課程の変遷」（安原義仁）にも、教育学的思考法の出現の影響を見るべきだろう。一八〇〇年の試験規程によつて、大学学位試験は競争的かつ公開性をもつ口頭試問試験となり、一八三〇年代の筆記試験普及後も口頭試問の要素は色濃く残った。優等学士課程は一八〇七年の数学の分離を嚆矢に専門分化への動きをはじめ、一八六四年に古典学が必修から外されたことでこの動きは加速していく。しかし古典学は中間予備試験やカレッジの大学昇格に際して大きな意義を保持し続けた。オックスフォードの「諸学部争い」の中では、古典学は二〇世紀に至るまで優位を保った。

十二章で問題となる口頭試問は、ヨーロッパにおける修辞学の伝統的位置づけを想起させる。続く結「人文学の未来のために」（南川高志）冒頭において、修辞学が再度言及されるのは見事な構成とも言えようか。紀元一世紀の作品『サテュリコン』の一節に、富裕な解放奴隷が幾何学・文学・修辞学のような無用な知に疎いことを誇る場面があるという。しかし、作者のペトロニウスは元老院議員でもあり、この場面は自戒ではなく無教養な商人を皮肉る意図で書かれている。修辞学は即物的実用性を低下させつつも、「支配階層に相応しい教養」として継承され続けた。人文学の有用性はどこに担保されるのか、研究者は自覚的であらねばならないと警鐘を鳴らして本書は終わっている。

本書全体を貫くキーワードを乱暴は承知で三つ挙げれば、「軍人」「宗教」「蛮族」となるだろうか。

第一に、いわゆる人文学の中でも、とりわけ歴史学と古典学の歴史的展開が多く論文で中心的関心となっている。これは本書が歴史学関係者を中心に編まれたためである、といつていいだろうか。四章と七章を強引にまとめれば、歴史学は十八世紀まで神学・軍制論・国制論の補助学として実学的に機能していた。とすれば歴史学は常に、九章の中世的分類でいえば「自由学芸」ではなく統制を受ける上級学部の一部、という側面を有していた。この意味での歴史学においてはギリシャではなくローマがより多く参照されたことは、モンテスキューやギボンを想起すれば想像はつく。武器の歴史学が歴史学の武器だった、とでも表現できるだろうか。ヨーロッパでは、歴史は常に軍人や政治家にとって利用価値のあるものだった。だとすれば、本書は「人文学」内部の抗争や分化にもつと焦点を当てていくべきだったのかもしれない。

第二に、人文学と神学との関連について。イエズス会は本書の随所に顔を出す組織だが、アリストテレスと並ぶ規範の古典としての聖書は人文学知にとつてどのような存在だったのだろうか。形式陶冶（徳育、規律訓練）の技術が修道院からイエズス会を経て教育学に回収されたとすれば、神学的教養・学知の展開について示唆する論文が一つ欲しかった感はある。しかしヨーロッパの人文学知の裏地としてのキリスト教を否応なく感知させる点で、本書は宗教的要因についても十分な目配りをしている、と評価できる。

第三に、人文学的学知の、外部「蛮族」との関係について。

イエズス会は布教組織であると同時に、人文学を流布させた組織でもあった。本書ではヨーロッパの外部やユダヤ教徒について言及がないのが惜しまれるが、紙幅の制限を考えれば、正教世界（八・十章）あるいはもう少し大雑把に東方（五・六章）がイエズス会／カトリック神学にとつての「蛮族」として登場することによしとするべきだろうか。人文学的学知を規定し、その受益者を設定し、彼等に教養を注入する作業というのは、地理的な他者のみでなく、ヨーロッパ（「ラテン文化」＝西欧、と言うべきだろうか）の内部においても行われていた。人文学的教養の象徴資本性についての考察は、序文に言及があるにもかかわらず、本書全体でやや希薄だったように感じられる。単にこのテーマが一通りの研究サイクルを終えたということかもしれない。しかし文化資本としての個々の知識や振舞いの象徴的秩序を、その担い手と併

せて考察すること、言い換えれば知識の優先順位の理由付けのシステム自体について再考することは、現在ますます必要になっていいると思われる。

- ① ギンズブルグ、カルロ「歴史・レトリック・実証」上村忠勇訳、みすず書房、二〇〇一（原著一九九九）、第一章。
- ② デリダ、ジャック「大学の瞳Ⅱ後見人」「哲学を教えること」「思想」七一八号、一九八四―四、二七八―三四頁。スノー、C・P「二つの文化と科学革命」みすず書房、一九九九（原著一九五九）。
- ③ 同書第三章を参照。ギンズブルグは本書に対する補助線を提供していると言える。

（A5判 三四〇―四頁 二〇〇七年三月 ミネルヴァ書房（MINERVA）

V A 西洋史ライブラリー） 四五〇〇円＋税）

（京都大学人文科学研究所准教授）